

身体知研究の可能性

藤波努（北陸先端科学技術大学院大学）

[注意] この文章は学術的な論文ではなく、日頃思っていることを散文的に書き留めたものです。内容に学術的な裏付けはありませんのでご注意ください。

1. はじめに

身体知の研究について、他のパネラーがオープンスキルの重要性や課題の複雑性について述べているので、ここでは視点を変えて、一人称的に主体の立場から身体知研究について述べる。科学に関わる者は観察対象から自らを切り離すことで客観的立場を確保し、そのことによって自らの恣意的な判断に影響されない「普遍的な」結論に達することを善しとするものであるが、ここではその立場を尊重しつつも、その他の可能性を探索する。また一人称的視点だけではなく、二人称的視点からの考察も試みる。一部の読者にとって違和感のある議論となるかもしれないが、ここでの目的は客観的に対象を観察し、主観に左右されない方法によって結論を導き出す方法を否定することではなく、それ以外の可能性も示唆することで、研究としての豊かさを思い描くことにある。

2. 感覚について

身体知とは何かをここで厳密に定義することはしないが、どのような要素から成るかは述べる。身体知研究が対象とする楽器演奏やスポーツの巧みな動きを見ると、緻密な動作にまず目を奪われる。技巧とはパワーやスピード以外の要素であり、知的なものを感じさせる。知的と感じさせる要因がどこにあるかといえば、それは個々の動きに状況判断や配慮といったものが含まれているからではないかと思われる。それは「考えている」と表現しても構わないものであるが、そこに体が介在している点が「身体知」と呼びたくなる由縁であろう。

ときどき筆者は「身体知」を「体で考えること」と乱暴に定義するが、もう少し正確を期すなら「体も含めて考える」と言うべきであろう。これと対比されるのは「頭だけで考える」ことだと思うが、これらを分けるものは何であろう

か。筆者はそれが「感覚」ではないかと考える。五感や体勢感覚を通して得られる刺激（ここでは敢えて情報という用語を避けます）が「考える過程」に影響する点が、身体知というコンセプトの核にあるのではないかと考える。

では「感覚」をどのように考えたらよいのであろうか。ひとつの問題は、それが主体的なものであり得る点である。ここで「主観的」と言っていない点に注意していただきたい。感じ方に個人差（ばらつき）があるという意味で、感覚は主観的といえる。同じ部屋にいても人によって暑いと感じたり、寒いと感じたりする現象は主観性の現れといえる。ただ個人差はいろいろな条件を揃えていけば究極的には解消されるものであり、客観的な指標（たとえば気温）に正確に比例するものと考え。個人差は、言ってみればレンズの歪みのようなものである。感覚の対象が同じである限りは、そこから得られる刺激も（本来は万人にとって）同じである。個人差は誤差でしかない。

ここで「主体的」（この用語自体は適当に決めたので後々変える必要がありますが）という表現で強調したいことは、動きと感覚が相互に影響しあっていること、動きの違いが感覚の違いに影響することだ。例としては適切ではありませんが（というのも巧みさではなくスピードとかパワーの話になってしまうので）、100m が 9 秒で走れたら何が感じられるのだろうかと考えてみる。もちろん筆者はそんなスピードでは走れないから想像するしかないが、空気がゼリーみたいに感じられて、そこに切り込んでいくような感覚なのかもしれない。あるいはソプラノ歌手 T さんのことを考えてみる。本気で歌っているときの体表面の振動を測定したら高周波の倍音成分がたくさん出ていた。自分の声でホール全体を震わせているとき、皮膚がホールの壁まで延長していくような感覚なのだろうか。

大したスキルを持ち合わせていない自分にとって熟練者がどのように自己の身体を感じ、どのように世界を感じ取っているのかは想像するほかないのだが、ひとついえるのはそういった感覚も技術の重要な一面であるということだ。感じられなければそれについて考えることが出来ないのだから。そしてそのような感覚をもたらしているのが長年の修練であるとするなら、特別な行為が特別な感覚をもたらしているといえる。ずいぶん回りくどい言い方になってしまう

だが、特殊な感覚は精妙に制御された行為の賜であって、動作の工夫なしには得られなかったものである。そのような意味で、ここでは「主体的」と呼んでいる。

行為と知覚がカップリングしていることについてはもちろんいろいろなところで指摘されていることであるから、敢えてそのことをここで強調する必要もないが、スキルの習得には緻密な動作ができるようになることだけでなく、同時にそのような緻密さを可能にする精妙な感覚があることを指摘したい。行為と感覚は相互依存の関係にあるから、どのように感じるかがどのような行為を取るかに影響するし、どのように行為するかが何を感じ取るかに影響する。スキルの習得は意識的に為されるものだと著者は考えるので、学習者は習得過程で動きを精巧に組み直しているだけでなく、自らの感覚をも組み変えていると捉えたい。

問題は、そのようにして獲得した感覚の地位である。それは客観的存在だろうか。人によって異なるという点で客観的とはいえない。行為者が存在するが故の知覚であるということは行為がなければ存在しないとも言え、そうすると観察者（関与者と言い換えておく）の有無で有ったり無かったりするものは客観的ではないと言わざるを得ない。では主観的だろうか？そう言うにはまた抵抗がある。なぜなら主観的という用語には「周りのこととは関係なく」といったニュアンスがあり、そういった独善から上で挙げた例（主体的と呼んだもの）は無縁という気がするからだ。行為者が感じているものは勝手に本人が作り上げたものではない。

主体的感覚と（ここで便宜的に呼んでいるもの）は、環境とそこに埋め込まれた行為者との相互作用から生み出されるものであって、客観的でも主観的でもないが一貫性がある。このように客観的なものに還元できず、かといって主観的であると退けることもできないものが顕わになるところが身体知研究の面白さではないかと思う。（なおここでは行為の背後には必ず何らかの感覚があること・支えられていること・を前提としている。）

3. 他者と身体的につながる感覚

前章で述べたのは身体知への一人称的視点である。そこでは他者というものは考慮されていなかった。ここでは身体知というアイデアが他者との関わりについてどのような方法論をもたらすのか、荒削りではあるがスケッチしてみる。

他者との関わりについて、身体知の視点から私が考えるようになったきっかけはマルタ大のグループとの関わりであり、彼らとの（身体知とは別の方向からの）接点は我々が地区の小学校を拠点に進めている小学生と地域の老人、認知症高齢者の演劇を媒介とした交流である。ここでのキーワードは「演劇」である。

演劇では俳優らが舞台にて演技し、ストーリーを観客の前で表現することであるが我々が注目するのはショー（見せ物）としての演劇ではなく、シナリオも含めた劇を作っていく過程、さらに動きを洗練していくリハーサルの段階である。シナリオ作成については我々の場合、地域の歴史に題材を求め、子供たちがお年寄りに話を聞いてストーリーを作っていくという過程があり、そこには地域共同体の成立に物語が果たす役割という（重要な）テーマがあるのだが、本論の主題から外れるのでこれ以上言及しない。

劇で演じられるのは、細かに見ていくと要素要素は我々の日常生活にある動作である。挨拶するとかご飯を食べるとか、あとはあまりないが喧嘩したり、闘ったり。もちろん演技は（多くの場合）一人で成立するものではなく、相方がいて、やりとりが発生する。劇を作っていく（リハーサル）過程では、そういった日常の行為を純化していく作業となる。では日常行為の純化とはどのようなものであるか？

著者は演劇の専門家ではないので（高校生のときに演劇部に属したことはありますが）、その過程がどのようなものなのかよくわからないが、マルタ大のグループと話したところでは、余計な物（夾雑物）を取り除いていくことだという。たとえばガラスのコップで水を飲むといった指示がシナリオにあったとき、日々多くの人が生活でしているように水を飲んだのでは演技にならない。どのように夾雑物を取り除いていくのか著者にはわからないが、説明によれば自分が暗黙の前提としていたことに気づく過程だという。

このあたりのことについて著者は素人なので、これ以上の意見は差し控えたい。演劇と行っても様々なスタイルがあるから一概にこれが演技であるともいえな
いだろう。特に私とつきあいのある研究者らは日本の能のような、様式美を追
究する演技を称賛するので、ああいった静かな、だが迫力のある演技を理想と
する演劇人の意見として聞いておくことに留める。ただひとつ指摘しておきた
いのは、演技とは観客が見て面白いとか興味を持つ動きを創作することではな
く、ある行為の本質は何かを追究することという姿勢である。それは科学的探
究に限りなく近い。しかしその過程は思弁的ではなく、いろいろな動作をやっ
てみて考える、動くことで何かを感じ、行為の本質を突き詰めるという点で、
身体知研究になっている。

個別の演技やその組み立て方についてはよくわからないが、ペアになって行う
練習は体験し、洞察を得たのでそのことに触れる。彼らが行う練習は **stick-work**
と呼ばれており、長さ 120cm ほどの棒をお腹で支え合って、それを落とさない
ように協働して動くというものである。実際のワークは難易度の低いものから
高いものまで、制限の違いによっていろいろなやり方があるが、その本質は相
手の意図を読むということにある。ただし考えてから動いているのは動作が合わ
ず、棒が落ちてしまうので、日本的にいうところの「あ、うん」の呼吸が要求
される。

stick-work のようなペアワークによって養われるのは、対人的な身体知である
と考える。(二人称的というのはその意味である。) なぜ一緒になって動くこと
を「知」と呼ぶかといえば、そのような知が欠けている人の動きを見たからで
ある。個人が特定されることを避けるため、できるだけ事実を伏せて述べるが、
精神的な問題を抱えていると著者が知る者がセッションに参加したことがあつ
た。背景を知っていたから気になったので、その人がどのように動くのかを観
察していたが、相手のこと(気持ちなど)がまったくわからないようだったので驚いた。相手の事情(姿勢や準備状況など)にまったく構わず、自分の動き
たいように前進したり、退いたりしていたのである。

当然のことながらそのペアはタスクをうまく行かず、何度も棒を落としていた
けれども、そのような単純なタスクでさえ、行為者の対人関係の取り方が顕わ

になることに驚くと共に感心した。日頃、学生の教育に関わる者としては気づきにくい心の問題を早い段階で見つけられるかもしれないなど、不埒なことを考えたりもするが、ここで重要なのは相手を感じるということも、相互的行為の中で学ぶというか発見することなのだろうという点である。

なかなか表現しにくいけれども、stick-work が提起しているのは、相手と身体的に関わるという行為が能動的であると同時に、その関わりから感じ取られるものがあり、それがまた次の行為に影響を及ぼすという、上で見たのと同じ（感覚と行為の）相互規定的構造があることである。演劇という装置がその過程をより赤裸々にするものであるなら、それは人が人に関わるとはどういうことかを探究する仕組みであるといえる。

ここでようやく別プロジェクトとして我々が行ってきている地域での活動と話がリンクするのであるが、演劇を方法論として地域コミュニティを創造していくというアプローチが可能性として考えられる。おそらく我々がやろうとしているのはそういうことなのだろうという理解である。非常に理解しにくい考えであることは自覚しているけれども、古代ギリシアにおいて演劇が社会に果たした役割を考えるとわかりやすいかもしれない。専門外なので的外れかもしれないが、民主政治の成立と劇場の成立は不可分だったのではないかと思う。古代ギリシア市民らの世界観は劇場において形をなし、それが議会にて投影されて法令などになったのではないか。

ごちゃごちゃとわかりにくく書いてしまったが、言いたいのは「演劇」という装置を用いることで、言説レベルではない暗黙知の、あるいは身体レベルの対話を促進し、そこでの成果を用いて地域や地方の行政を豊かにしていくという可能性があるのではないかということである。言葉には暴力的な側面もあって、うまく語れない者を排除するところがある。子供や老人（特に認知症を患った人）は被害者の例であって、上手く語れないが故に行政の中で主体的に振る舞うことが困難な立場におかれている。身体という場所へ立ち戻ること、言葉の暴力から人々を解放し、万人が対等の立場で関わり合う社会が可能になるかもしれない。

4. まとめ：主体性を維持すること

わかりにくいことを書いてしまったが、まとめらしいことで締めくくるとすると、スキルの研究は当事者が担うべき、といったことになるだろう。スキルとはなにかを一般的あるいは個別に研究することはもちろん重要であるが、それが自らの行為と切り離されたものだとしたらあまり意味がないのではないか。我々は（ここでの「我々」は身体知を研究するコミュニティという意味）熟練の技を分析し、その精妙さや巧みさに感心するけれども、目標はさらにその先にあつて、熟練者としてさらにその上を目差すことだろうと思う。

そもそも我々が相手にしているのは客観的真理ではない。我々の興味は新しい方法で世界（あるいは環境）と関わる時、どのように世界が立ち現れてくるのか、それを元に次の手を考えるにはどうしたらよいかといったことにあると思う。我々は創造者であつて（あるいはあるべきであり）、傍観者ではない。データをとって分析するのは理解の一助であつて、それ自体が目標であつてはならない（のではないか）。

ここで述べたことが客観的立場を是とする科学の枠組みからはみ出していることは重々承知しているし、また現実的に論文誌に投稿するとなれば、客観性と分析の中立性を重視する立場にいったん自分を収めることになるが、そこだけに活動を限定してしまうと身体知の研究としては何か本来の精神を損なっているような気がする。

この研究会（身体知研究会）では、本来の専門性からやや離れて趣味的にやっていることを題材に、データ収集の方法や解析の方法について語る方が多いが、その「趣味的」部分が大切なのではないかと思う。なぜならそこには主体性があるからである。だから我々としては、「これは趣味でやってる研究なんですが、、、」という前口上を恥ずかしさを誤魔化すための言い訳としてではなく、対象への積極的関わりを明示している発言として受け止めるべきと思う。というわけで、身体知研究会はこれからも趣味の話を自由にできる場であつて欲しいと願う。

（了）